



Title	「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性：(3) 「ハイピアリアン」独自の詩行について その2
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 110-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン の没落」の同一性と差異性

—(3)「ハイピアリアン」独自の詩行について—その2

安藤幸江

はじめに

O. L. R. 第18号に引き続き、この小論では「ハイピアリアン」第2巻、167-243行を考察する。ここは、サターンの願いに応えて、没落の苦しみに喘ぐタイタン達にオーシアナスが慰めの言葉を与えるところである。このオーシアナスの言葉は、キーツの人生観及び芸術観を極めてよく表わしている点で重要で、この詩の流れの一頂点ともなっている。

1. オーシアナスの役割

海神オーシアナスは、キーツによれば、“Sophist and sage” (*Hyperion*, II, 168) である。ここでの“sophist”とは、ギリシア時代のソフィスト、いわゆる、詭弁家ではなくて、語の真の意味での philosopher, 「愛知者」= 哲学者である。オーシアナスは哲学者であり、賢人である。キーツにおいては、哲学者や賢人こそが苦悩する者達に人生上の指針や慰めを与えることができる。

『エンディミオン』では、グローカスは「心配に疲れた賢人」(“that care-worn sage,” III, 290) と称されるだけであるが、「レイミア」にあっては、アポロニアスは「賢人、私の信頼のおける案内役」(“sage, my trusty guide,” I, 375) として、賢人の積極的な姿が描かれている。「バーガンディー、クラレット、ポートよ、去れ」では、「詩人達の父」であるアポロにキーツは「まじめな哲学」を分けて下さいと頼み、アポロを哲学の神としている。「没落」では「確かに詩人は賢人である」(“sure a poet is a sage,” I, 189)。キーツはオーシアナスに哲学者、賢人として、タイタ

ン達の苦悩を癒す役割を与えた。実際にはその役割は果されなかったが。

キーツは感覚派の詩人だと評される。事実、1817年11月22日、友人のベイリーに「理想よりも感覚の生活を！」と感覚を求める言葉を吐く。「レイミア」では、冷たく理性的な「哲学が天使の翼を切る」(“Philosophy will clip an Angel's wings,” II, 234) と言って、近代科学の進歩が自然の美しさや人間の自然に対する夢を砕くと批判している。しかし、自分自身が感覚的であるという認識があるためか、知識や哲学への憧れも非常に強い。それは手紙の中に見られる。1818年5月3日、友人のレイノルズ宛書簡でキーツは、人生を数多くの部屋のある大邸宅に喩えているが、その二つの部屋しか探索できず、後は暗く、まるで霧の中にいるように感じる。ところが、ワーズワースはこの暗闇を探索できるのである。彼は、人間の内面生活や自意識の探索において非常に優れていて、キーツ達を凌ぎ、更には、ミルトンよりも深い洞察力があるとキーツは評価する。ミルトンは、個人としては、ワーズワースと同じぐらいの力を持っているかもしれないのに、ワーズワースの方が、哲学者としてより深い洞察力があるのは、時代の進歩に伴って人間の知性が進歩したためであるとキーツは解釈する。キーツ達青年も、生きそして考え続けてゆけば、人間の内面生活を探索できるであろうと明言している。この時点より、キーツはそれまでの感覚に頼った生活や詩作から思想に重きを置いた生活や詩作へと変化してゆくように思われる。そしてこの世の苦しみ、人間の内面の苦悩へと眼を向けてゆく。

2. オーシアナスの慰め

—赤裸裸な真実に耐えること

賢人、哲学者としてオーシアナスはどんな慰めをタイタン達に与えているか。まず、彼はタイタン達に敗北に満足しなければならない理由を話す。敗北に満足するということは敗北に苦しむ者にとっては酷なことである。彼は真実の中に慰めを見い出すようにと言う。彼らの没落は自然の法則に

よるものであって、雷やジュピターの力によるものではないと彼は語る。自然の法則は不変の摂理、事物の流れとも言うべきもので、避け難いものである。神々といえども、如何ともし難いものである。この摂理、法則をキーツは「永遠の真理」と呼ぶ。この「永遠の真理」はサターンのような高位にある者には見えず、オーシアナスのような、私利私欲を追わない「無私の心の人」にのみ見えるのである。オーシアナスは言葉を続ける。

... to bear all naked truths
 And to envisage circumstance, all calm,
 That is the top of sovereignty,
 (*Hyperion*, II, 203-5)

... 総ての赤裸裸な真実に耐え、
 冷静に状況に立ち向かうこと、
 それが最高の主権である。

王位を失ったこと、没落したことを嘆き悲しむのではなく、この事実を冷静に受けとめることが王者であった者として相応しいことである。まさに、世を達観する (take things like a philosopher) ののである。

このオーシアナスの「赤裸裸な真実に耐え、状況に冷静に立ち向かう」というのは、キーツが1817年12月27日(?)に弟達に宛てた手紙の中で語った「消極的受容力」“Negative Capability”の考えの線上に位置するものであって、キーツの重要な人生観である。「消極的受容力」についてキーツは次のように述べている。

どんな特質が特に文学において優れた仕事をした人を形作っているか (シェークスピアが非常に多く所有していた特質)、ということが私の心を打った。私は「消極的受容力」のことを言っているのだが、それは人が事実や理由をいらいらと追い求めるのではなくて、不確実や、神秘や、疑惑の中に安んじていることのできる状態である。

オーシアナスの言葉はこの「消極的受容力」を言い変えたものであるが、「総ての赤裸裸な真実に耐え、状況に冷静に立ち向かう」というのも含蓄

のある言葉である。もっとも、これを禁欲的な態度であると評する学者もいるが。1) キーツはどんな不幸に出会っても、その現実から逃れようとはしないで、現実そのものを直視し、それに耐えてゆくことを良しとする。キーツ自身、さまざまな不幸な目に会いながら、自分を見失わず、詩人としての精進を重ねた。彼はこの世を「涙の谷」と呼ばないで、「魂を作る谷」と呼んでいる。この世の辛いこと、悲しいこと、総てがその人間の人格を鍛えるのに役に立つと考える。

オーシアナスの説くこの態度をタイタン達は理屈としては判っても、それを納得することはできないし、そこから慰めを得ることもできない。それは、オーシアナス自身、「無私の心の人」であり、個性“identity”を持たない神で、キーツの言葉を借りれば、「天才」“Men of Genius”の側に立つ神であり、これに対して、没落したタイタン達は、固有の自我“proper self”を持っていて、「権力者」“Men of Power”の側に立つ神だからであろう。

天才は．．．個性も決まった性格も持たない。私は固有の自我を持っている人間の最たる者を権力者と呼ぶ。

(1817年11月22日 ベイリー宛)

この「ハイピアリオン」には、「天才」の側に立つ神と「権力者」の側に立つ神との対比が描かれている。

3. 永遠の法則

オーシアナスの言う永遠の法則、自然の法則とはどのようなものだろうか。

For 'tis the eternal law
That first in beauty should be first in might.

(*Hyperion*, II, 228-9)

美において一位の者は、権力においても一位であるのが、永遠の法則であるから。

オーシアナスによれば、美と権力は一体である。私達人間界では、美が必ずしも権力を持つということはないが、完全さを目指す神の世界にあっては、美と権力とは一体と考えるのが自然であろう。

サターンをはじめとするタイタン達が没落したのは、彼らよりも美しい者が登場したからである。キーツの言葉によれば、「新しい完全なる者」“fresh perfection”の出現、「美においてより強く、私達から生まれ、私達を凌ぐように運命づけられた力」(“a power more strong in beauty, born of us / And fated to excel us,” II, 223-4)の出現のためである。あたかもタイタン達が彼らの父母である暗黒より美しいが故に、この世界を支配したかのように。

．．． who do tower
Above us in their beauty, and must reign
In right there of.

(*Hyperion*, II, 226-8)

．．． 美において
私達より勝れており、それ故に
必ずこの世を支配するものたち。

キーツはより美しいものへとこの世界は進んでゆくと述べている。ダーウィンの『種の起源』が発表されたのは、1856年である。この進化論の40年程前に、キーツは世界進化と人間の知性の進歩とを信じていたようである。人間の知性の進歩は、先に述べたように、ミルトンの時代よりもワーズワースの時代の方が、一般大衆の知性は進んでいるとするところに見られる。結局、キーツによれば、世界進化の法則は美である。次にキーツの美についての考えを見たい。

4. 美について

彼の美についての考えは、プラトンの考えによく似ており、ハズリットの影響を深く受けているようである。

プラトンは『国家』で、「美しい声とか、美しい色とか、美しい形とか、またすべてのこの種のものによって形づくられた作品に愛着を寄せるけれども、〈美〉そのものの本性を見きわめてこれに愛着を寄せるということは、彼らの精神にはできない」²⁾者と、美しいものと共に、「〈美〉そのものにまで到達して、これをそれ自体として観得することのできる者」³⁾との二者を区別している。そして前者を〈思惑愛好者〉とし、後者を〈愛知者〉(哲学者)としている。キーツは明らかに後者である。そして「〈美〉そのものが確在することを信じ、それ自体とそれを分けもっているものとを、ともに観得とる能力をもって」⁴⁾いる。言いかえれば、個々の美しいものと、〈美〉そのものとの両方を観得している。

まず、キーツの美しいものへの愛と認識について。『エンディミオン』冒頭の有名な句、「美しいものは永遠に喜びである」“A thing of beauty is a joy forever”に代表されるように、非常に感覚的である。また、これらの持つ美しさは儂いものとして認識される。

She dwells with Beauty — Beauty that must die;

(*Ode on Melancholy*, III, 1)

彼女は美——死ななければならない美と共に住んでいる。

．．． Beauty cannot keep her lustrous eyes,

(*Ode to a Nightingale*, III, 29)

．．． 美もその輝く瞳を保てない。

儂い命ではあるが感覚の喜びである、このような美しいものに対する愛や憧れが、キーツの詩作の源である、と彼は語る。

美しいものに対して抱いている憧れと愛着のみから私は書くべきだと確信している。
(1818年10月27日 ウッドハウス宛)

．．． 私は最も羨ましい人間となるだろう——美しいものに対して私は熱望の情熱を抱いているのだから。
(1818年10月24日 弟夫妻宛)

こういう考えから、キーツは感覚派の詩人、唯美主義者と言われるのである。彼の美そのものへの愛情も手紙によく表われている。

私は大衆に対して——存在する如何なるものに対しても些かの謙虚な気持も感じることはない——が、永遠の存在、美の原理には（謙虚な気持を）感じる。（1818年4月9日 レイノルズ宛）

「美の原理」はキーツの好んで使う言葉であるが、これはプラトンの「美そのもの」、或いは、「美のイデア」と同じものである。別の手紙でも彼は次のように言っている。

私はあらゆるものの中にある美の原理を愛してきた。
（1820年2月(?) ファニー・ブ라운宛）

この「美の原理」をキーツは「あらゆるものの中に存在する美に対して私が抱く力強い抽象的考え」（1818年10月24日 弟夫妻宛）とも言う。「美に対する愛」をキーツは終生変わらず強く持ち続けた。「美に対する愛」は「美意識」「sense of Beauty」と同じものと考えてよいと思うが、「美意識」は偉大な詩人にとって重要である。

偉大な詩人において美意識は総ての他の思考を圧倒する。むしろ、総ての思考を抹殺する。（1817年12月31日 ヘイドン宛）

キーツは美そのものを真理と同一のものとする。

想像力が美として把えるものが、真理であるにちがいない。
（1817年11月22日 ベイリー宛）

この言葉にあるように、美そのものの認識にあたって、プラトンとは異なり、「想像力」の働きを主張しているところに、ロマン主義の詩人としての面目が窺われる。

美と真理を同一とする考え方を示す表現は他にもある。

どんな真理も、その美を明確に認識しない限り、信じることはできない。
（1818年12月31日 弟夫妻宛）

「ギリシャの壺のオード」で壺に語らせる、キーツの真髓と言われる有名な言葉

'Beauty is truth, truth beauty' — that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.
(*Ode on a Grecian Urn*, 49-50)

「美は真理、真理は美」——あなた方が地上で
知っているのは、そして知る必要があるのはそれだけだ。

この美と真理を同一とするキーツの見地は、コールドウェルが指摘しているように、ハズリットの影響を受けたものである。⁵⁾ キーツはハズリットの著書を幾冊か持っていたし、彼の講演にも出かけ、彼と散歩をし、食事を共にした。ハズリットは次のように述べている。「本当の芸術家にとって、真理、自然、美は同じものの異なった名前である」。⁶⁾ 「真理と美の純粋な鏡」⁷⁾、「見つけられる所では、私達は真理と美を探し求める」。⁸⁾ このように、ハズリットにおいて美と真理は同一のものとして一緒に論述される。

「美は真理である」という思想は、キーツの詩人として、人間としての全成長において重要な意味を持つ信条である。プラトンやハズリットの影響の跡が看取されるのは確かであるが、キーツはそれらを彼なりに消化し、自分の言葉で機会あるごとに表現している。この事実は、彼が感覚派の詩人であったばかりでなく、知性派の詩人でもあったこと、或いはそうなるように努力していたことを、示している。プラトンの定義に従えば、キーツは「愛知者」、「哲学者」であると言える。

おわりに

美そのものとそれを分かちもっている個々の美との両方を観得している哲学者の立場を、キーツは、「ハイピアリアン」ではオーシアナスに与えている。そして彼に自己の人生観を語らせている。こうして、オーシアナ

118 「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性
スはキーツの知性的な面の代弁者であると言えよう。

注

- 1) Stuart M. Sperry, *Keats the Poet* (Princeton: Princeton University Press, 1974), p. 185.
- 2) プラトン著, 藤沢令夫訳『国家』(岩波書店, プラトン全集11, 1976), 401ページ。
- 3) 同上, 402ページ。
- 4) 同上, 402ページ。
- 5) James Ralston Caldwell, *John Keats' Fancy* (New York: Octagon Books, 1792) pp. 172-186.
- 6) *Ibid.*, p. 172.
- 7) *Ibid.*, p. 172.
- 8) *Ibid.*, p. 173.